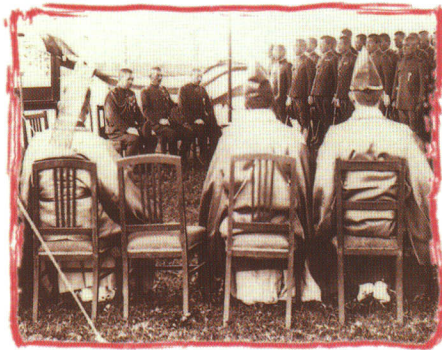


昭

和に入っても矢吹が原は、国営猟区として草を刈り、簡単な整地がなされただけで、そのほとんどが原野のまま残っていました。

昭和三年、航空思想普及と宣伝を図る新聞社の企画により、九月二十三日、矢吹が原に飛行機が来訪しました。当時、飛行機はとても珍しいものであったため、近郷近在の人々が五万人も見学に来ました。その後、現在の矢吹町役場の西北裏に仮飛行場が設けられ、昭和七年九月十八日、十九日には愛国福島号が着陸しました。また、昭和九年十月二十七日には霞ヶ浦から海軍偵察機三機が、翌二十八日には福島県民が献納した海軍機報国福島号など四機が命名式と披露のために着陸しました。

こうしたことから、矢吹が原の平坦な土地は陸軍飛行場の候補地として注目され、昭和十二年五月二十三日には熊谷陸軍飛行学校矢吹分校として華々しく開場しました。戦局が一層厳しさを増す中、矢吹教育隊と名称を改め、昭和十八年には学徒動員令により学業半ばにした学生が特別操縦見習士官として入校してきました。彼らは消耗を続けるパイロットの促成補充を目的としたばかりでなく、戦争末期には爆弾を抱え



昭和12年5月23日 熊谷陸軍飛行学校矢吹分校として開場

本土空襲はしだいに激しさを増し、飛行場は攻撃目標として狙われました。昭和20年8月9日、10日の空襲により矢吹飛行場は破壊され、飛行場としての機能を失いました。



矢吹飛行場跡記念碑
有志団体「矢吹ふるさと塾」が元の在隊者、関係者に呼びかけ記念碑建立委員会を設立し、平成5年3月建立。

昭和7年9月18日、愛国福島号が着陸。近郷近在から5万人の見物人が集まった。